

浪川健治著『北奥社会と民衆』

松尾 正人

本書は、著者が博士学位請求論文「近世北奥社会の変容と民衆移動」をもとにし、新たな研究成果を加えて出版した著作である。著者は一九九二年に『近世日本と北方社会』（三省堂）を公刊したが、本書は近世後期から幕末にいたる「松前掾」に代表される民衆の動向を、移動という視点から精力的に考察している。民衆移動が切り開いた「近代移行期への可能性と限界」を、地域社会のなかで明らかにしようとする意欲的な著作である。

本書の主な構成は、以下のようである。

序章 問題の所在と本研究の課題

- 一、北奥地域の変容と民衆移動
- 二、クナシリ・メナシの蜂起と北奥諸藩
- 三、天明期の弘前藩の社会状況―地主経営と「松前掾」―
- 第一章 蝦夷地幕領化と民衆移動

一、「松前掾」と「面改」

二、蝦夷地の幕領化と農民支配

三、文化初年の幕藩関係

四、津軽アイヌの「同化」をめぐる

第二章 旅人統制の展開と「面改」

- 一、文化二年の旅人統制令について

二、「松前拵」と追鯡漁の展開

三、旅人の流入と文政九年の旅人統制令

四、旅人統制と民衆移動

五、北への移動の論理

第三章 天保飢饉と民衆移動

一、渡海する百姓たち

二、追鯡漁と藩権力

三、天保末期の旅人統制と「面改」

第四章 文久二年旅人統制令と文久三年「面改」

一、箱館開港と「松前拵」

二、文久二年旅人統制令をめぐって

三、文久三年「面改」の歴史的意義

第五章 幕末期の村落状況と民衆移動

一、「根井村面改帳」にみる幕末の村落

二、「名目」と人別

三、松前船と「沖船頭」

四、いわゆる「松前拵」をめぐって

第六章 幕末・維新期の社会と民衆動向―「悪習」の社会背景―

一、間山菊弥具上書について

二、文久期の農村状況―文久三年大光寺組金屋村―

三、地主Ⅱ「重立之者」と百姓層

四、幕末の社会状況―労働力の移動と「出火」―

五、制裁行為としての「投火」

終章 近代移行期における民衆移動と地域

各章の概要は、以下のようにまとめられる。

第一章の「蝦夷地幕領化と民衆移動」では、寛政四年のロシア使節ラクスマンの来航後、幕府がしだいに蝦夷地直轄化の方針を進め、その先兵としての役割を北奥諸藩が担ったこと、北奥地域が蝦夷地に対する人的供給地と位置づけられたことを分析した。幕府による文化二年からの箱館周辺開発にともなう労働力の移動は、荒廃田畑の復旧を基調とする寛政期以降の北奥諸藩の農政と対立し、幕府と藩の間の矛盾が顕在化する。そして、蝦夷地の「内国」化にともない、アイヌ「同化」政策の先兵となった北奥諸藩で「夷風」の排除が進められた。本州アイヌが居住していた弘前藩では、文化三年に再度の「同化」政策と民族性の否定が推進されたと論じている。

第二章の「旅人統制の展開と「面改」」では、異国船の出没や文化四年のサハリン・エトロフでの侵略事件、弘前藩の大筒台場の建設などにもない、同藩で農業生産の停滞や松前への労働力移動が恒常化したことを指摘した。蝦夷地に移動する「松前拵」が生活苦や貧困を理由とするのではなく、追鯡漁への船持層の参加と前金仕込による労働力編成へと形態を変化させていたという。そして弘前藩の文化二年の旅人統制令が旅人を取締つたのに対して、文政九年令が旅人を迎え入れる弘前藩領民への処罰を規定していたことを明らかにした。弘前藩領では、松前・蝦夷地への民衆移動があり、他方で労働力需要を補う「仮子」雇用などが行われて他領者の流入と定住化が進むという矛盾した現象を生じたことを指摘している。

第三章の「天保飢饉と民衆移動」では、天保飢饉にともなう男性労働力の村外流出に対して、弘前藩がその救済的施策を放棄し、村役人の政治力と地主の経済力に依拠するのみで、「公儀」のあるべき責任を放棄していたと論じた。松前出漁は「重立」層が組織したもので、松前町人の「名目」を借りて蝦夷地での鮮漁に従事していたという。藩側は、追鮮漁へ参入した船持層の松前・蝦夷地での経営に依拠し、より有利な年貢米の売却市場の確保をはかり、個別の「松前掛」を統制する一方で、「鮮場行」を積極的に藩政のなかに位置づけていたと分析した。藩側は天保十三年の旅人統制令によって民衆移動の把握と村落を基礎とする体制への回帰を企図し、さらに「面改」で家を中核とした把握を行って、天保飢饉後の動揺する権力基盤の再把握をはかったと論じる。

第四章の「文久二年旅人統制と文久三年「面改」」では、安政二年の箱館開港後、「松前掛」をめぐる組織的な労働力の渡海が行われ、弘前藩内で廢田が広範囲に発生し、海岸地域での「民兵」編成にも支障を生じるようになった事態を指摘した。文久二年の旅人統制令が流入・止宿の禁止・否定策ではなくなっていたと論じる。翌三年の「面改」実施を、將軍家茂の上洛と攘夷期限告示などの諸情勢に対応して弘前藩権力による支配の再生産基盤の把握を指向したものと位置づけ、渡航者の根絶が不可能なこと、海防遂行が急務なことから、妥協的な方策が取られたと評した。弘前藩の蝦夷地勤番体制の維持、幕末の諸情勢に対応すべき軍事動員体制の確保が急務になっていたとし、「内憂」と「外患」に対する戦略的な動向に注目している。

第五章の「幕末期の村落状況と民衆移動」では、幕末期の箱館や松前

の発展にともなう「松前掛」が活発になり、内陸農民が海岸筋の非血縁家族に入り込んで渡海する現象が顕在化したことを明らかにしている。村民が自ら「沖船頭」と名乗って弘前藩内の港に船を確保し、松前・江差などの新たな海上交通に参入するようになったことを論じた。

第六章の「幕末・維新期の社会と民衆動向」では、幕末・維新期の社会状況を踏まえて、初期県政下で制裁行為として実施された放火の「悪習」について、土地を失い小作人化した農民の抵抗の一形態としての社会的意味を追究した。出稼ぎによる農村離脱が顕著であった弘前藩領内では、「世直し」のような民衆側に一体化した要求行動を成立させる動機が生れず、先鋭的な闘争形態に発展しなかったという。その結果、「悪」の排除のための抵抗手段として用いられたのが「投火」だったと分析した。

以上のような本書は、とくに次の三点が、これまでの近世史研究を前進させ、高く評価できる成果と思われる。

第一の成果は、弘前藩の膨大な「御国日記」を分析し、同藩を中心とした近代移行期における民衆移動の様相と地域の実情を解明したことである。弘前で記録された「御国日記」は、江戸上屋敷の「江戸日記」とならぶ藩の公式記録であり、本書は総数三三〇一冊の「御国日記」の内の寛政元年から元治元年までの一〇二〇冊を丹念に調査・分析している。そして、旅人そのものを取締った文化二年の旅人統制令に対して、文政九年のそれが旅人を迎え入れる弘前藩領民への処罰規定を定めていたこと、天保十三年の旅人統制令が民衆移動の把握と村落体制の復活を企図したこと、さらに文久二年の旅人統制令が合法的手段を取らせてその掌

握をはかった方策に転換していたことなどを論じた。蝦夷地での「松前拵」や箱館開港・海防強化などにもなう労働力移動に対して、弘前藩が松前・蝦夷地との関係強化で藩財政を確保するようになっていたことから、同藩が「松前拵」の禁止を徹底できなかったとの指摘は、近代への過渡期の社会状況の分析として興味ぶかい。

第二の成果は、「松前拵」に関係した村方の動向について、横内組の根井村と浅虫村の事例を分析し、天保から文久期における同地域と松前・蝦夷地との間の人々の移動が、必ずしも生活苦や貧困者に限られない実態を具体的に解明した点である。箱館における対外貿易の展開や都市的發展とあいまって若年女子労働力を主体とする町場奉公が増えたこと、内陸農民が「養弟」の名義を借りて海岸筋の非血縁家族に入り込んで渡海することなどの指摘が興味深い。村民が松前・江差などの町人を名義上の船主として、自ら「沖船頭」と名乗って弘前藩内の港に船を確保し、松前・江差など広域的な海上交通の展開を行うようになったことの分析も注目できる。

第三は、弘前藩領民の「松前拵」と地域のあり方を分析し、それが幕藩体制の解体過程とどのような関係にあったのかを論じた点である。大光寺組金屋村の戸数人別田畑共取調帳を用いて、天保・嘉永・文久期の実態分析を行い、天保末年以降に農業奉公人の確保が困難になって手作地の減少と小作地の増大傾向が進み、それが文久期に顕著になったことを明らかにしている。農村で自らの再生産をできない存在が必ずしも小作人となって農村内に滞留することにならず、出稼ぎによる農村離脱という状況を生じたことを指摘した。農業経営は他領から移動してきた労

働力によって補完されたが、それが「民衆側にも総体に共通する要求行動を成立させる可能性を減少させ」、広汎な闘争形態を形成することを困難にしたと論じている。一般に幕末に展開した世直し一揆は、村落内に滞留する半プロ層をその主体として土地取戻しなどを掲げて広域的に闘われた。それに対して、出稼ぎによる農村離脱という形が多かった弘前藩領では、民衆側に一体化した要求行動を成立させる動機が形成されず、「世直し」などを生じなかったと位置づけた点が、地域的特質を明らかにした研究成果として注目できる。

ところで、このように評価できる本書にも、残された課題がないわけではない。

課題の第一は、民衆移動の検討が主に法令などの分析を中心とし、数量的な分析や弘前藩を超えた全体的な考察が必ずしも十分でない点である。「松前拵」については、渡海者の文化・文政期以降の年次的変動、弘前藩以外の地域との比較、「松前拵」を受入れた松前・江差や蝦夷地の実態などについてのより具体的な分析が必要となる。史料的な限界が大きいとはいえ、松前や蝦夷地側の動向に関する把握、盛岡・秋田などの他地域との比較・検討を十分に行うことが、弘前藩領民の「松前拵」と地域のあり方についての実証的な研究とするために欠かせないように思われる。

第二の課題は、近代移行期における民衆移動をテーマとしながら、対象が文久期ごろまでの分析にとどまっている点である。安政二年の箱館開港にもなう変化のより実態的な分析、青森県設置後の旧弘前藩領民と北海道との関係性への展望、などの不十分なことが残念に思われる。

幕府の蝦夷地政策は、箱館開港後に大きく転換をせまられたことが間違いない。開港場や五稜郭の建設、寛政年間にはじまって安政期にも再開された八王子千人同心の蝦夷地移住・開拓など、北奥諸地域にあたえた影響は少なくない。箱館開港場の建設については本書でも言及されているが、その後を含めた近世からの連続面と近代の新たな転換についての考察が今後の課題と思われる。

最後に若干の課題を記したが、それは無理を承知で求めた蛇足にすぎない。本書の充実した内容は、著者が参加している青森県史編纂にも大きな刺激となる。本書の地域に根ざした着実な分析が、日本近世史のこれまでの研究にあたえた影響は大きく、著者の今後の活躍を大いに期待したい。

(A5判、吉川弘文館、三〇四頁、二〇〇五年一月刊、七九八〇円)

(まつお・まさひと 中央大学文学部教授)